エチオピア南西部におけるコーヒーの栽培・流通・消費に関する歴史人類学的研究

Historical anthropological study on the production, consumption, and transportation of coffee in Ethiopia

石原　美奈子（南山大学・人文学部）
吉田　早悠里（名古屋大学・人文学部）
ISHIHARA, Minako (Nanzan University・Faculty of Humanities)
YOSHIDA, Sayuri (Nagoya University・School of Humanities)

1. 和文アブストラクト

アラビカ種コーヒーはエチオピア起源であるとされ、エチオピア国内では南西部の「カファ」が「コーヒー発祥の地」として知られる。本稿は、エチオピア南西部がどのように「コーヒー発祥の地」となったのかを、コーヒーの栽培・流通・消費の歴史を通して明らかにする。いまやコーヒーはエチオピアを代表する、国民的飲み物となっているが、アラビアで始まった焙煎・粉末化して煎じて飲むコーヒーの利用法がエチオピアのムスリムのみならずキリスト教徒の間でも広まったのは 20 世紀に入ってからである。商品としてのコーヒーの価値に目覚めたキリスト教徒の支配者たちが南西部で一攫千金を手に入れるために土地を獲得しコーヒー栽培を進め、それにより南西部はコーヒーの一大生産地となった。デルグ政権期に一時停滞したものの、EPRDF 政権下での経済自由化の波をかいくぐり、コーヒーの生産はエチオピア南西部で質量ともに向上した。そして、エチオピア南西部では、行政、民間セクター、および生産者などコーヒーを核としてつながる行為者たちが「コーヒー発祥の地」というブランドを武器に、さらに世界のアクターとつながり、世界的な「コーヒー危機」を乗り越えようとしている。

2. 英文アブストラクト

Ethiopia is well-known as the place of origin of Coffea arabica, and “Kafa” located in the southwestern part of Ethiopia is known to be “the place where coffee was found.” This article deals with the way how southwest Ethiopia was formed into “the place of origin of coffee,” tracing the historical process of production, transportation, and consumption of coffee in the region since the beginning of the 20th century, when Ethiopia conquered the southwest and incorporated it into its empire. Recognizing the commercial value of coffee, the Christian elite coming from the north started land-grabbing and promoted coffee planting. After the economic stagnation under the Derg regime, economy was liberalized under the EPRDF and coffee production was improved in both quantity and quality, with a collaborative effort of the government, commercial sector and the producers. These coffee-related actors are struggling to overcome the “coffee crisis” by seeking linkage with the foreign organizations (NGOs, coffee importers), utilizing the name value of “Kafa, the place of origin of coffee.”

3. 研究目的

北東アフリカに位置するエチオピアは、アラビカ種コーヒーの原産地として知られる[1)]。また、世界でも有数のコーヒー輸出国であり、日本でも国別コーヒー生豆輸入量でエチオピアは第4位（ブラジル、ベトナム、コロンビアに次いで）を占めており[1]、エチオピアといえばコーヒーというイメージが強い。

とはいえ、エチオピア国内でコーヒーを栽培している地域は限定的であり、またエチオピアで焙煎コーヒーの飲用が国民的な慣習となったのも 20 世紀に入ってからのことである。コーヒーの主な生産地は、東部（「ハラル」として知られる）、南部（「シダモ」、「イルガチャフェ」）、西部（「ネケムテ」）、および南西部（「リンム」）である（「」はブランド名）。本論文で取り上げるのは、これらのうち「リンム」のブランド名で知られるコーヒーを生産する、オロミア州ジンマ県および南西エチオピア諸民族州である。コーヒー生産地は地域的に限定されているものの、今日、コーヒーはエチオピアの主要輸出品となっており、およそ 8000 万の総人口のうち 1500 万人もの農民がコーヒー栽培で生計を立てているとされる[2)]。

これらのコーヒー栽培地のなかでもエチオピア南西部はコーヒー発祥の地として知られ、コーヒーは主要な換金作物であるだけでなく、文化的にも重要な位置づけを占めてきた[3)]。本報告は、社会・経済・文化・観光など様々な側面において資源として利用されるコーヒーの価値の変遷を栽培・流通・消費の面から整理しながら南西部が「コーヒー発祥の地」として位置づけられてきた経緯を明らかにすることを目的とする。

4. 研究方法

本研究は、コーヒー栽培地域として知られるエチオピア南西部で 20～30 年間調査研究を行ってきた石原と吉田が中心となり、まずコーヒーの栽培・消費・流通に関する先行研究を整理した上で、近年の動向を把握するために 2024 年 8 月と 12 月に現地調査を行った。石原はジンマ県ゴンマ郡において、吉田はジンマ県ゲラ郡での調査をもとに、報告する。最後に、エチオピア南西部が「コーヒー発祥の地」として扱われるようになった経緯について考察を行う。

5. 研究成果

１）エチオピアにおけるコーヒー

現在コーヒーはエチオピアの主要輸出品となっており、年間総輸出高の 30～35%を占める。だが、エチオピアにおけるコーヒーは、主要輸出品であるだけでなく、国内消費もさかんである点に特徴があり、生産高の 5 割は国内で消費されていると言われている。今日エチオピアでは、ジャバナ（jäbäna、アムハラ語でコーヒー沸かし専用の土器）を用いたコーヒーの飲用は、隣近所に呼びかけて交流を深めたり、客人をもてなしたりする重要な媒体となっており、キリスト教徒もムスリムも毎日何度もコーヒーを飲む習慣がある。コーヒー豆を煎るところから始め 3 杯までコーヒーを沸かして飲む「コーヒー・セレモニー」

は、エチオピアの「伝統（bahəl、アムハラ語で伝統、文化の意）」と位置づけられ、外国人向けのメガ・ホテルのレストランだけでなく、街角の屋外コーヒー屋や農村の日常生活においても繰り返されるエチオピアの風物詩となっている[2]。そのため、いまやエチオピアでは国民的な飲み物となっているコーヒーの原産地を、語音の近似から南西部にある「カファ（Kafa）」であるとする主張について、エチオピア人もエチオピアを訪れる外国人も何の違和感もなく受け止めている[3)]。

このように今日コーヒーはエチオピアを代表する飲み物として知られてはいるものの、焙煎し炭化させたコーヒー豆を粉末にして煎じる今日の飲用法は、アラビアで開発され、紅海を越えてムスリム商人が交易ルートを介してエチオピアに伝えたとされる[4)]。つまり、コーヒーノキの起源は東アフリカであり、「15 世紀もしくはそれよりも前に」イファート（エチオピア北東部）もしくはハラルから紅海を渡ってイエメンに持ち込まれ、その後、煎じて飲むという方法がイエメンで開発され、その飲み方が 18 世紀にエチオピアに逆輸入されてムスリム共同体の間で広まったというのである[5)]。アラビアにおいて飲料物としてのコーヒーはカハワ（qahwa）と呼ばれるが、この言葉はスーフィー（イスラーム神秘主義）文学ではブドウ酒を意味する言葉であり、14 世紀末にはコーヒーを意味するようになった[6)]。カハワがワインからコーヒーへと意味の転換が起きた点について、臼井隆一郎は、コーヒーとワインだけでなく、北東アフリカからイエメンにかけて広く嗜好品として栽培・消費されているカート（Catha edulis）もまたカハワと結び付けられている点に注目する。そしてカハワの語根 qhw が「何かへの欲望を払う、少なくする、慎む」の意味合いをもつとして、コーヒーの性質を表すと説明する[7)]。したがって、もしコーヒー(coffee)の語源がカハワであるとすると、コーヒーの語源が「カファ（Kafa）」であるとする説は疑わしいということになるのだ。そして、もしコーヒーの語源であるとされるアラビア語のカハワがエチオピア南西部の「カファ（Kafa）」と無関係であるとするならば、カファがコーヒー発祥の地であるとする説は根拠のないものになってしまう。

そもそもカファがコーヒー発祥の地である可能性について指摘したのは、18 世紀後半にナイル川の源流を求めてエジプトからスーダン、そしてエチオピアを旅したスコットランド出身のジェームズ・ブルースであるとされる[8)]。イタリア人地理学者アントニオ・チェッキも次のように述べている。

> マサイヤ師[3]の意見によると、これ（コーヒーの重要性）はカフィッチョ（カファ語を話す人々）とイエメンのモカのアラブの伝統に基づいており、このアカネ科植物は、多くの植物学者がアラビア起源と主張しているが、実際にはカファからきており、名前もそこに由来する[9)]。（括弧内は筆者追記）

だが、この説に対して、疑義も呈されている。Van Arendonk は、コーヒーが（アラブに

伝来した）1400 年にカファから輸出されていたとする証拠がなく、カハワに類似する言葉もエチオピア諸言語にはない、コーヒーに相当する言葉はエチオピアではブン（bun）である[4]、という点を挙げて、この説に反論している[10)]。つまり、ヨーロッパ諸語でのコーヒー（英 coffee、仏 café、伊 caffè）がアラビア語 qahwa に由来するならば、コーヒーはカファとは無関係であるということになり、ヨーロッパへのコーヒーの伝播がアラビア経由であることを考えると、この説の方が信憑性が高いということになるのである。

コーヒーが、エチオピアにおいて地名であり民族名でもあるカファに音声的に近似していることから、カファが「コーヒー発祥の地」であるとする説が導き出され、その論理の正当性が否定されるのであれば、カファはコーヒー発祥の地である可能性は低くなる。だが、エチオピア南西部の森にコーヒーが自生しており、「野生」のコーヒーがあることは事実であり[11)]、コーヒーは今日の利用法（種子を炭化・粉末化し煎じて飲む方法）以外にも様々な仕方で利用されている。そのため、植物としてのコーヒーノキの起源がエチオピア南西部である可能性は十分あり、遺伝子分析によってもそれは検証されている[12)]。

以下に、コーヒーの多様な用いられ方を列挙してみよう。

①殻付きコーヒー豆の多様な消費法

エチオピアの最大民族オロモは、コーヒー豆を殻付きのままバターで煎って食べる（buna qalaa と呼ぶ）ほか、かつてコーヒー豆を炭化・粉末化し、それをバターで球状に固めて、旅の糧食としていた。

②コーヒー豆（種子）以外の部位の使用法

あぶったコーヒーの葉をトウガラシやニンニク・ショウガとともに煮だして飲む方法は、南西部のオモ系諸民族カファ、ベンチ、シェコやナイロ＝サハラ語族マジャンギルなどの民族で多用されている。これらの民族の人びとが、朝晩飲むのは、コーヒーの豆を炭化・粉末化して煎じたものではなく、このコーヒー葉茶（チェーモと呼ばれる）である。また、エチオピア東部のハラルでは、コーヒー豆の乾燥した外殻（カシャル）を茶のようにして飲用する。

③コーヒーの儀礼的利用法

福井（1981）は、コーヒーがエチオピアの諸民族、とりわけ南西部に住むオモ系、クシ系、そしてナイロ＝サハラ語族の人びとの間で、様々な儀礼において象徴的な媒体として利用されていることを報告している。

また、家田（2007）は、西ウォッレガ地方のオロモ社会における妊娠・出産に関する調査のなかでコーヒー豆が出産に伴う儀礼のなかで多用されていることを明らかにしている。例えば、出産後、後産とへその緒を殻付きコーヒー豆、発芽トウモロコシ、草、牛糞等とともに家（寝室）の床の下に埋めるといった慣習がある[13)]。

したがって、エチオピア南西部は、炭化させ粉末化したコーヒーを煎じて飲む利用法が一般的となっている他の地域と異なり、多種多様な利用法を、コーヒーが商品作物として

の価値が高まる以前から開発・維持していたことになる。こうした多様な利用法の存在を根拠にしてコーヒーノキが南西部であると主張することは可能である。

２）エチオピア南西部の栽培・消費・流通の歴史的変遷

エチオピア南西部からコーヒーが交易ルートを通って中東諸国（紅海経由でアラビア、もしくはスーダン経由でエジプト）に向けて搬出されるようになったのは、19 世紀に入ってからである[14]。19 世紀に当時商品価値の高かった資源（麝香、金、象牙、奴隷等）の豊かな南西部から陸路でムスリム商人たちがラバなど荷駄を用いて搬出を行った。19 世紀末に北部のキリスト教王国が資源豊かな南部一帯を征服し、エチオピア帝国が成立すると、南西部は中央から派遣されてきたアムハラ貴族の政治経済的支配と搾取を受けるようになった。1974 年に革命が起きて、軍部主導のデルグ政権が成立し、社会主義が導入されると、封建的土地支配の体制は崩壊し、アムハラ貴族等が開設した大農園は国有化された。このデルグ政権が 1991 年にエチオピア人民革命民主戦線（EPRDF）による首都陥落によって倒れると、2019 年まで EPRDF 政権が民族連邦制と開発主義に基づく統治を展開した[15]。

国家体制や経済的成長によってエチオピア南西部におけるコーヒーの栽培・消費・流通の形態がどのように変遷を遂げたのかについて、整理する。

① 19 世紀の王国時代

19 世紀、エチオピア南西部にはオロモのムスリム王国（ギベ 5 王国）とその南にカファ王国があった。19 世紀後半に南西部を探検したイタリア人地理学者アントニオ・チェッキは、エチオピア南西部のオロモの 5 王国のうち 3 王国（リンム、ゴンマ、ゲラ王国）、さらにゴジェブ川の対岸にあったカファ王国について報告し、その中で、コーヒーの扱い方の違いについて言及している。ギベ 5 王国、とくにコーヒーが自生するリンム王国やゲラ王国において、森に自生するコーヒーは王の専有物とされ、王は奴隷を使ってコーヒー摘みを行い、ラバに積載して北部へと送り出す。その際、王国の臣民はコーヒーを摘んだり、消費したりすることを禁じられていた[16]。

一方、カファ王国では「コーヒーの木で囲まれていない家」はなく、「各世帯で消費できる以上の量を生産する」とあり、コーヒーの消費が一般家庭にも普及していたことがわかる。そこでは、コーヒーは「塩をつけてバターで煎って食べたり、私たちと同様、煎じて飲んだりする」[17]とある。つまり、コーヒーは一部の特権階級が独占的に所有し消費するものではなかったのである。

コーヒーの扱いについてはオロモの王国とカファ王国の間で違いがみられたものの、19 世紀を通して南西部から海外へ輸出されるコーヒーの量は限定的であった。というのも、当時南西エチオピア産のコーヒーはハラルや（イエメンの）モカ産のコーヒーに比べて低品質であると評価されたため価格が低く抑えられ、しかも嵩が大きく扱いにくかったため、国内消費用に搬出されるにとどまった。コーヒーは小規模の商業を担うムスリム商人たちが、当時まだコーヒー飲用を禁止されていたキリスト教王国を迂回し、北東部のムスリム

王国ワッラ・ヒマノへと運搬していた。キリスト教王国では、19 世紀末にメネリク 2 世（在位 1889-1912 年）が皇帝になり教会を抱き込んでコーヒーの飲用を許可するまで、キリスト教徒のコーヒー摂取は宗教的に禁止されていた。そのため、コーヒーの需要は王国内に点在するムスリム共同体に限定されていたのである[18]。

② 20 世紀の帝政期：北部出身貴族によるコーヒー搾取

19 世紀末、ショワ（エチオピア中央部）の王メネリクは、1882 年にエンバボ戦でゴジャム（エチオピア北西部）の軍勢を破り、ゴジャムが征服したばかりの南西部の支配権を手に入れた。ギベ 5 王国のうち、ジンマ王国のみが従属的地位を受け入れたため、毎年多額の貢納品を納めることと引き換えに王国の存続と自治を許された。メネリクが 1889 年に皇帝メネリク 2 世となった後もジンマ王国の自治は認められ、それはメネリク 2 世の皇位継承者リジ・イヤスの統治下でも保障された。しかし、ジンマ王国の処遇とは裏腹に、ギベ川流域の他の 4 王国やカファ王国にはキリスト教徒のアムハラ貴族が行政官として送り込まれ、北部からのアムハラ移民も流入し、各地に教会が建てられた。1916 年にリジ・イヤスが失脚し、メネリクの娘ザウディトゥが皇位につき、さらにそのもとで摂政を務めたラス・タファリが 1930 年にハイレセラシエ 1 世として皇帝になると、中央集権化が推し進められた。ジブチ港と首都アジスアベバを結ぶ鉄道が 1917 年に開通すると、1920 年代半ばにはエチオピアからの総輸出額の 3 分の 1 をコーヒーが占めるようになった。それに伴い、南西部の交易網のハブであるとともに、主要なコーヒー生産地であったジンマを国家の直接統治下に置くことは重要課題となっていた。そこで、ラス・タファリはまず 1926 年に首都アジスアベバとジンマを結ぶ道路の建設に着手し、続いて 1931 年には中央政府から関税官吏ナガドラス・サハレ・エシェテが 100 人の衛兵とともにジンマに送り込まれた[19]。それによりジンマ王国は、関税収入を中央に奪われ、主要な収入源を断たれた。中央から要求される納税義務を果たすことができなくなった王アッバ・ジファール 2 世は、農民に増税負担を強いた。

1932 年半ば、ジンマ王国内で増税反対を訴える農民たちによる蜂起が発生し、王アッバ・ジファール 2 世の後継者と目されていた孫のアッバ・ジョービルが反乱を扇動した疑いで逮捕された。その代わりに中央から派遣されたのが皇帝の義理の息子ラス・デスタ・ダムトウである。ラス・デスタは、1920 年代にゴンマ（旧ギベ 5 王国の一つ）やカファの行政官を務めた経験があり、国家経済におけるコーヒーの重要性をよく理解していた[20]（表 1 参照）。

カファ州の行政官	就任期間
Ras Desta Damtew	1932~1933
Dejazmach Wolde Amanuel	1933~1936
イタリア統治時代	1936~1941
Ras Birru Wolde Gabriel	1942~1945
Ras Mesfin Sileshi	1945~1955
（中略）	
Dejazmach Tsehayu Enqu Selassie	1969~1974

表１　カファ州の行政官と就任期間

1930 年代半ばから 1940 年代末まで、世界大恐慌の影響や、イタリアによる植民地統治（1936-41）下で（コーヒー等の嗜好品よりも）穀物生産に重点が置かれたこと等の理由からエチオピアからのコーヒーの輸出額は減少した[21]。イタリア統治から解放後、亡命先からエチオピアに帰国した皇帝ハイレセラシエ 1 世は中央集権化を強力に推し進めた。まず、エチオピアを 14 の州（täklay gəzat）に分割し、南西部はカファ州にまとめられ、カファ州は 6 つの県（awraja）に分けられた（地図 1 参照）。

地図１　帝政期のカファ州（吉田早悠里作成）

1950 年代以降、世界的なコーヒー景気が訪れた。コーヒー栽培が本格的に広がったのもこの時期である。すでに 1920 年代から、コーヒーが大きな利益を生み出すことを見越して北部出身のアムハラ貴族がこの地域に移住し、土地を獲得するとともに小農たちにコーヒーの栽培を推奨していた。また、先祖代々南西部に居住してきた在来民族（オロモ、カファ、ベンチ等）の小農や在来領主層（balabbat）も、小規模ながらコーヒー農園をもっていた。それに加えて、1950 年代以降、出稼ぎ労働移民、北部出身の貴族層、商人がコーヒー生産に参入してきた[22]。出稼ぎ労働移民は、奴隷制の廃止により生じた労働力不足を補う

ために他地域から移住してきた季節労働者であり、一部はこの地に土地を入手して定住した。

北部出身の貴族層からコーヒー農園経営に乗り出した人物にフィタウラリ・ゲブレクリストス・マコネンがいる。彼は、祖父デジャズマッチ・ウォサネが 20 世紀初めにゴンマの行政官であった時に入手した土地でコーヒー農園を開設した[23]。ゲブレクリストスは近代的技術の導入に熱心で、1960 年 2 月、ケニアやタンザニアに赴き、コーヒー農園を訪ねコーヒー生産・精製技術について学んで戻ってきた[24]。1960 年代半ばに行われた FAO によるコーヒー調査団の報告書には、ゲブレクリストスがすでに水洗式コーヒー精製技術[5]を導入していたことが紹介されている[25]。1960 年代半ば、ゴンマ郡アガロに農業省の支援のもとで「ゴンマ・コーヒー農民協同組合」が設立された時[26]、ゲブレクリストスは地域のコーヒー生産者に協同組合への参加を呼びかけた。だが、組合は商人たちの妨害にあって、コーヒーの生産者販売価格の引き上げに失敗したため、その成果は限定的であった[27]。

また同じく北部出身の貴族で公務員からコーヒー農園経営に転じた人物にリジ･アバテ･ムラトがいる。彼は 1940 年代半ば、皇帝ハイレセラシエ 1 世からリンム・コサ郡に 360 ヘクタールの土地を姉タテルとともに授与され、さらにスントゥ（現在のリンム･ゲンネト）付近の土地を購入して、計 1068 ヘクタールの土地を入手し、その内 142 ヘクタールをコーヒー農園にあてた。リジ・アバテは乾燥式と水洗式両方の方法でコーヒー豆を精製し、350～500 人もの日雇い労働者を雇っていた。またジンマ農業技術学校卒の人物を農場経営者として雇った。リジ･アバテの大きな功績の一つは、1960 年にドイツと英国を訪問した際、コーヒー輸出に関する合意を取り付けたことであった[28]。

このほかにジンマで商人･企業家として知られるようになった人物にケンニャズマッチ･タッカ・エガノがいる。タッカはグラゲ民族出身でイタリア統治期の後、ジンマにやってきた。ゴンマ郡アガロ町でギリシア人企業家の下でソフトドリンクや酒類の卸売業を始め、ジンマ市に移ってからホテル業にも着手し、ジンマの「タッカ・ホテル」を開業した。1950 年代半ば、タッカはコーヒー栽培も手掛けるようになり、ゲラ郡のチラとジンマ市の北西にあるドヨにコーヒー農園を開設した。とくに、ドヨで開設したコーヒー農園は、ガランティナとアレクサンドラキンという外国人との共同出資で経営しており、そこで生産されたコーヒーはドイツに輸出されていた[29]。

一方、公権力を利用して、大規模な土地を手に入れ、コーヒー栽培の普及に大きく貢献した人物にラス・メスフィン・シレシがいる。カファ州の知事となったラス・メスフィンは、様々な手段（没収・購入・贈呈）によって土地を獲得した。ラス・メスフィン自身だけでなくその妻イェシンマベト・グマもコーヒーに投資し、「2508 ヘクタール近くの土地を購入し、その内 400 ヘクタールの土地を、それを購入した金額よりも高い値段で売却した」[30]。ラス・メスフィンは、イルバボール州知事時代（1942~1946）とカファ州知事時代（1946~55）にこれらの地域だけで 5 万ガシャ（200 万ヘクタール）もの土地を所有してい

たとされる[31]。メスフィンは、カファ州の知事を離職して内務大臣となった後もジンマ・リンムのコーヒー農園を保持し続け、1974 年の革命勃発時には、エチオピアで最も裕福であったとさえ言われている[32]。

ラス・メスフィンは、まずジンマ市の東にあるバッダ・ブナ（オロモ語で「コーヒーの森」の意）を在来地主から買い取り、コーヒー栽培を始め、周辺に居住する在来地主から供出させた労働者を使ってコーヒー農園の経営を進めた。この土地は、80 ヘクタールのコーヒー農園に発展し、5 人の外国人によって運営され、一部は 1952 年に設立されたジンマ農業大学の実験農場となった。またゴンマ郡のセンニョ・ゲベヤ（「月曜市場」の意。現在のゲンベ町）周辺の土地を在来地主アッバ・ガロ・アッバ・フォギの子孫より譲り受けた。さらに、チェレレキ（リンム・ゲンネト町から 35 キロ）で、かつてメネリク 2 世統治下で南西部征服を任されていたラス・ウォルデギヨルギス（1918 年没）が所有していた土地を入手し、米国・オランダ国籍の投資家に貸与した[33]。

ラス・メスフィンは、コーヒー農園の経営など生産部門だけでなく、流通部門も独占したとされる。彼はジンマからコーヒーをアジスアベバまで搬送するためのトラック運輸業を独占しただけでなく[34]、カファ州知事を離職し内務大臣に就任した後も、農業大臣、商業産業大臣、財務大臣、内務大臣、国立銀行長官を含む 7 人のメンバーから構成された国家コーヒー委員会(NCB: National Coffee Board)（1957 年設立）を通してコーヒー産業への影響を保持し続け、コーヒーの輸出・販売により巨万の富を築き上げた[35]。つまり、1950~60 年代、南西部においてコーヒーは、北部出身の貴族層や商人が、在来地主や小農から土地を奪う動因となったのであり、土地を失った農民は分益小作農や賃金労働者となった。

以上のように、1950 年代以降南西部では、①森林コーヒー（badda bunna）、②半森林コーヒー、③家庭農園コーヒー、④プランテーション（大農園）のコーヒー、の 4 つの様式によるコーヒー生産体制が確立した[36]。

また、国家レベルでも 1950 年代のエチオピアにおいてコーヒーは重要な輸出商品としてその価値を認められるようになった。1950 年代初頭、エチオピアからアメリカに向けて輸出されたコーヒーがあまりに品質が悪かったためニューヨーク港で海に廃棄されるという事件が起きた。それがきっかけとなって、1952 年に品質の悪いコーヒーの輸出を禁止する法令が出され、同年、商業産業省ではコーヒーの洗浄と品質評価に関する規定が制定された。だが、コーヒー栽培の普及を推進していた農業省との連携がうまくとれていなかったために、コーヒーの栽培・流通を管轄する政府機関として 1957 年に NCB が設立された[37]。

この NCB と農業省の協力の下で 1958 年に設立されたのが、ジンマ・コーヒー研究センターである。この研究センターは、コーヒーの品種に関する研究と普及の拠点となった。

③デルグ政権期（1974~1991 年）：国家統制と国営農園

デルグ政権期、コーヒーの生産は停滞した。1974 年革命以前、南西部のコーヒー大農園

の大半は北部出身の貴族層や商人、もしくは在来地主によって所有されていた。在来の多くの小農たちは、分益小作農となっていた。だが、革命後、1975 年には「土地を小作農へ」を標語に土地改革条例が制定され、土地保有制度が大きく変わった。まず、土地全般が国有とされ、10 ヘクタール以上の農地は国有化され、家族の規模に応じて小農に再分配された[38]。また、大規模なコーヒー農園は国営農園となった。南西部カファ州には、以下のような国営農園が成立した。

a)リンム・スントゥ、b)リンム・コサ、c)グメル、d)チェレレキ、e)ゴンマⅠ、f)ゴンマⅡ、g)ベベカ、h)テピ

例えば、フィタウラリ・ゲブレクリストスが経営していたコーヒー大農園は「ゴンマⅡ」として、また在来領主グラズマッチ・アッバ・ワリ・アッバ・サンビが所有していたコーヒー農園は「ゴンマⅠ」として国有化された[39]。だが、コーヒー栽培地のなかでこれら国営のコーヒー農園が占める面積の割合はわずか 5%にとどまった。

これと並行して、農村は農民組合（PA: Peasant Association）に組織され、これは行政の末端機関となった。農民組合には共有地が設けられ、これは PA とコーヒー改善プロジェクト（CIP: Coffee Improvement Project）（後述）の監督の下、小農たちの労働力によって支えられていた。これとは別に政府主導で生産者協同組合（PC: Producers' Cooperatives）が設立された。これは組合員たちが労働力と資本を供出して、売り上げもシェアするもので、1980 年代にこうした共有地は拡大した。1970 年代から 1989 年までの間、小農たちは週に 2～3 日はこうした共有地や生産者組合で無償労働することを義務付けられた。国営農園の近くに居住する小農は、これに加えて国営農園での無償労働も加わった[40]。

生産部門のみならず、コーヒーの精製・流通部門においても、国家の統制が及んだ。コーヒーの流通は、主にエチオピア・コーヒー流通公社（ECMC: Ethiopia Coffee Marketing Corporation）によって担われるようになり、民間が担う部分は限定的であった[41]。この時期、カサフンらが調査を行ったジンマ県ゴンマ郡のコーヒー生産地では、小農たちが生産したコーヒーのうち、規定量を政府管轄のサービス協同組合（SC: Service Cooperatives）が運営する水洗式コーヒー精製所に持ち込むことが求められた。残りのコーヒーについては、殻つきの状態で乾燥させたもの（jänfäl）を、SC もしくは民間商人に販売した。いずれにしても、生産地域からコーヒーを持ち出すことは厳しく規制されており、生産者の販売価格は低く抑えられた。コーヒーの販売価格が低かっただけでなく、コーヒー栽培地では土地と収穫高に応じて（他の作物には課されることのなかった）税が課されたため、コーヒーから主食のトウモロコシの栽培に転作する小農も増えた。だが、1989 年にエチオピアが混合経済に転じると、こうした共産体制は崩壊した[42]。

エチオピアのコーヒー生産高が減少したのは、こうした生産・流通面での共同化だけに原因があるわけではない。1971 年にエチオピアで確認されたコーヒーベリー病（CBD: Coffee Berry Disease）[6]の拡がりによるところが大きい。政府は、EU の支援を受けて 1977

年に CIP を設立し、CBD に抵抗力のある品種の開発と植栽を開始した[43]。しかし、当初 CIP が改良品種の普及対象としていたのは、国営農園や PC の共有地であり、小農は後回しにされた。実際、私が 1992 年末にジンマ県ゴンマ郡のコーヒー栽培地域の農村 S 村で調査を行ったところ、まだ CBD の蔓延によりコーヒーの収穫高は低迷しており、高齢の旧木の伐採も行われておらず、農村は疲弊していた[44]。

③ EPRDF 政権期：自由市場化と市場ルートの多様化

EPRDF 政権は、世銀・IMF が推奨する構造調整政策を導入し経済自由化路線を歩むようになり、コーヒー生産・流通部門において幾つかの大きな変化が起きた。

ECX の導入

流通部門では、大幅な自由化が行われた。それにともない、国際価格の変動が直接コーヒー生産者の買取価格に反映されるようになった[45]。世界市場でのコーヒー価格の下落は直接エチオピアのコーヒー生産者の収入の減少につながるようになり、「コーヒー危機」が起きた。世界的なコーヒー価格の下落は、ベトナムやブラジルにおける生産量の増大に伴うコーヒー市場における供給過多に起因する[46]。

一方、生産者の販売価格と輸出価格の格差を是正する取り組みとして、2008 年にエチオピア商品取引所（ECX: Ethiopia Commodity Exchange）が開設された。これは、流通部門の効率化と農産物の価格の公正化を目的としており、コーヒーを含めすべての農業生産物の価格決定がこの取引所を通してなされるようになった。ECX 発足当初は、南西部のジンマ市やボンガ市でも農産物価格が表示される電光掲示板が設置され、生産者も国際価格の動向などの情報にアクセスできるようになり、中間搾取の低減が期待された。だが、ECX がコーヒー取引に及ぼした影響については、小規模のコーヒー生産者が直接輸出業者と取引を行うのを阻んでいるとの指摘もあり[47]、ECX を経由しない市場取引ルートも成立し、コーヒー流通についてはその役割は減じている。

国営農園の民間への払い下げ

エチオピア南西部にはデルグ政権期に形成されたいくつかの国営コーヒー農園（リンム・コサ郡内にあるコサ、スントゥ、グマル、チョラ・ボトル郡にあるチェレレキ、ならびにゴンマ郡内にあるゴンマ I、ゴンマ II、さらに南西エチオピア諸民族州にあるベベカ）は、すべて 2013/14 年にミッドロック・グループ会社傘下にある Horizon 社が買い取った。現在同社はコーヒー農園を合計で 14,646 ヘクタール有するとされている[7]。

そのほか、南西部には国営のテピ・コーヒー開発公社（1987/88 年設立）が現在の行政区分ではガンベラ州内に存在する。この公社は段階的に民営化され、2015 年にレッドスターズ持ち株会社（Redstars Holding Company）の傘下に入った。現在 9040 ヘクタールを有する[8]。

民営化されることにより、これらコーヒー・プランテーションの生産高は大幅に上昇した。民営化される以前は隔年で生産高の増減変動がみられたが、その問題は、手入れを行

き届かせることによって解決されたとのことである[9]。

Davis らの調査によると、現在コーヒーにはおおよそ 5 つの生産形態がみられ、全生産高に占める割合を次のように推定している。①森林コーヒー（10%）、②半森林コーヒー（20%）、③森林農園コーヒー（30%）、④家庭農園コーヒー（20%）、⑤プランテーション・コーヒー（5～10%）[48]。つまり、全国のコーヒー生産高に占める大規模コーヒー農園の生産量の割合は低いのが実情であり、これは民営化により、今後改善される見込みがあるとされる。

コーヒー協同組合の増加

昨今注目されているのが、コーヒー協同組合の取り組みである[49]。国内の商店でも、国内各地のコーヒー協同組合が精製に携わった焙煎コーヒーの商品が店頭に並ぶようになった。なかには、海外の貿易会社と直接取引してコーヒーを輸出する協同組合も出てきており、オークションを経由せずに新たな販路を独自に開拓している[50]。

デルグ政権の社会主義的政策のもとで生産者協同組合の試みはとん挫し、EPRDF 政権のもとで顧みられることはなかった。にもかかわらず、EPRDF 政権下で、1998 年に「協同組合法」が公布され、1999 年以降、コーヒー生産地各地でコーヒー協同組合が出現するようになった。協同組合は階層組織を形成しており、下から「一次組合（primary cooperative）」「連合（union）」「連盟（federation）」「組合連盟（cooperative league）」となっており、農業の様々な分野にわたって協同組合が結成されるなかに「コーヒー協同組合」も含まれている[51]。

筆者が調査を行ったオロミア州ジンマ県には「ジンマ農業協同組合連合」が 2004 年 1 月に設立された[10]。設立当初は、ジンマ県内の 4 つの郡（Qarsa 郡、T'iro Afata（現 Nadi Gibe）郡、Sokoru 郡、Omo Nada 郡）の下で 14 の協同組合が設けられたが、いまや 10 の郡の下で 240 の協同組合が設立されており、その数は増えている。とはいえ、問題がないわけではない。

2006 年に児玉（2007）が南部のゲデオ県のイルガチャフェ・コーヒー協同組合連合とその傘下の一次協同組合で行った調査によると、生産者から買い取るための資金の不足や、生産者からの買い取りをめぐるコーヒー商人との競合関係など、2024 年に筆者がジンマ県で聞き取りを行ったのと同様の問題が生じていることを指摘している。Zakarias ら（2016）のエチオピア南西部での調査によると、同じジンマ県内のコーヒー協同組合でも、輸出販路にアクセスできて成功しているものと、資金繰りに苦しんでいるものとに二分されている[52]。そして、コーヒー協同組合が直面している課題を 3 つ挙げている。第一に、資金不足である。協同組合への資金の貸付を主要目的とする「オロミア協同組合銀行(Cooperative Bank of Oromiya)」は、貸付金の返還ができる見込みのない協同組合に対する貸付をしぶり始めている。生産者は、支払いの滞りが目立つ協同組合よりも、即時支払いに応じてくれるコーヒー商人にコーヒーを売り渡すことが増えている。第二に、協同組合が会員である

生産者に対してコーヒーの生産性を高めるための技術的知識を提供できない点が挙げられている。そして第三に、協同組合の経営能力の不足である。

協同組合が直面したこうした課題に対して、解決の方策をもたらしたのが、OXFAM やテクノサーブ（TechnoServe）[11]などの NGO であった。ジンマ県内で、テクノサーブの支援を受けて一部のコーヒー協同組合が国際市場に独自に販路を見出し、大きな成功をおさめることができたのである。そのひとつに Duromina 協同組合がある。

Duromina は、ジンマ農業協同組合連合で「成功例」として紹介されたが、そこは、私が 1992 年に初めて村落調査を行った S 村の近くにある。当時、S 村はコーヒー栽培農村であったにもかかわらず、CBD の蔓延により困窮状態にあり、税の支払い拒否が続いていた。Duromina の成功によってどのような変貌を遂げたのか、についても確認したかったので調査に赴いた（事例１）。一方、協同組合が直面する課題もある。事例２では、吉田が 2006 年から調査を行っているジンマ県ゲラ郡において、コーヒー協同組合がコーヒー水洗加工場の個人事業者との競合のなかで苦戦を強いられていることが明らかにされている。

【事例１：ジンマ県ゴンマ郡カダマサ行政村】

2024 年 12 月 24 日、ゴンマ郡アガロ市にある Kataa Mudugaa[12]協同組合連合事務所を訪ねた[13]。Kataa Mudugaa 協同組合連合は 2016 年に設立され、5 つの郡（Gomma、Gera、Guma、Setemma、Sigimo）に存在する 81 の一次農業協同組合を統括する組織であるが、そのうちコーヒーの一次協同組合は 48 ある。これら一次協同組合のすべてに水洗式のコーヒー精製施設が備わっており、なかでも Duromina 協同組合がもっとも成功している。Duromina はグレード 1 のスペシャリティ・コーヒーに特化しており、昨年度は 1000 万ブル[14]の売上があり、その利益で道路や学校、クリニックなどを建設した。

TH 氏の案内で Duromina 一次協同組合を訪ねた。Duromina は 3 つのサイトをもっており、その一つ（サイト 2）を訪ねた。かつて牧草地であったという 1.5 ヘクタールの土地に、集められたコーヒーを水洗する精製施設、それを 1 日だけ乾燥させる屋根付きの水切り台（mänt’aft’afiya）、および 10 日間（皮付きのまま）天日干しにする乾燥台が所狭しと並べられており、15 人ほどの作業員[15]たちがコーヒー豆のごみ取りを行っていた。作業員たちは長時間の野外作業に耐えられるように麦わら帽子をかぶっており、飲み水用の水道が備えられ、救急医療用ブースもあった。昨年は、サイト 2 だけから 60 キロ袋を 6000 個（36,000 キロ）出荷した。その利益で近くの Boto 町の保健所の医療従事者の住居を建てることができた。

Duromina については、海外のコーヒー取引会社もネットで紹介している。例えば、オランダの Menno Simons 氏が 2000 年頃設立した Trabocca 社は、エチオピアのコーヒーをオランダや米国にも輸出している。そのサイトで Duromina を紹介している[16]。そこには、CBD の蔓延によりコーヒーの生産が大きく落ち込み、コーヒー栽培で生計を立てていた農民たちが困窮していたところ、米国の NGO（TechnoServe）がビジネス・アドバイスやトレーニ

ングを実施する事業を開始し、2010 年に Duromina 協同組合が立ち上がった、と紹介されていた。設立当初は会員 114 人から始まった Duromina も現在 400 人に達している。かつてはグレード 5 の国内消費向けのコーヒーしか生産できていなかったが、いまや 80%はグレード 1 の輸出用のスペシャリティ・コーヒーを出荷できるようになっている。

インタビューによると、米国のスターバックス社も日本の丸紅も直接ここに買い付けにやってくるとのことであった。私が Duromina のサイト 2 を見学していると、私の名前を呼ぶ中年男性が近づいてきた。30 年前に調査を行っていた頃の私を知っていたその男性は、「外国人たちが来てくれたおかげで」当時と比べると格段に生活が改善したと述べた。

【ジンマ県ゲラ郡】

吉田の調査地ジンマ県ゲラ郡では、日本の国際協力機構 JICA が 2003 年 10 月から 2012 年 3 月まで「ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画プロジェクト」を実施した。そこでは、地域住民による森林管理が持続的に行われることを目標とした参加型森林管理を軸としたうえで、地域住民の間で森林管理組合(以下、WaBuB)を組織し、組合に加入する住民に対する参加型森林管理方法の普及を目的としたワークショップの開催、ファーマーズ・スクールの開校、森林コーヒーの国際認証取得や販売、認証コーヒーの栽培指導などを行った。2014 年から 2020 年までは「REDD+及び付加価値型森林コーヒー生産・販売促進プロジェクト」が実施された。この一連のプロジェクトで森林コーヒーの買い取りの末端組織としての機能を果たしたのが WaBuB であった。

JICA の森林コーヒーの買い付けの対象となるのは、乾燥（ナチュラル）方式のものであった。一般的に、収穫を終えた後のコーヒー豆の処理工程は大きく分けてふたつある。ひとつはコーヒーチェリーの果肉を除去して、発酵、水洗いをして仕上げていく水洗（ウォッシュド）方式である。もうひとつは、摘み取ったコーヒーチェリーを高床式の乾燥棚に広げて数週間かけて天日乾燥させた後に、その乾果を脱穀して外皮、果肉、パーチメントを除去する乾燥（ナチュラル）方式である。いずれの方式も成熟したコーヒーチェリーと、未成熟のコーヒーチェリーが混ざれば品質が落ちるが、水洗方式では農民がコーヒーチェリーを持ち込んで果肉を除去する前に選別が可能である。一方で、乾燥方式では農民が乾燥させて処理した乾果を持ち込むため、持ち込まれた時点で品質を選別することは不可能である。WaBuB は、適切な処理過程を経た森林コーヒーを、一般の買い取り価格に 15%から 20%のプレミアムをつけた価格で買い取り、脱穀のために町に輸送した。

しかし、2017 年 3 月から、政府主導でゲラ郡では各地に協同組合が組織されるようになった。そして、この協同組合のもとで、高値のつく水洗方式のコーヒー豆の処理・買い付けが行われるようになると、同時に WaBuB による乾燥方式のコーヒー豆の買い付けは下火になっていった。というのも、乾燥方式のコーヒー豆であれば、コーヒーチェリーを摘んだその日のうちに作業所に持っていくことができ、乾燥させる際の手間や管理は不要であるからである。さらに、水洗方式の処理・加工を行う機械を購入して加工場を設置する

個人の数も増加している。

例えば、ゲラ郡オッバトリ村では、2025 年現在、コーヒー水洗加工場が 5 か所ある。ひとつは、2017 年に設立された協同組合のものであり、残りの 4 か所は 2022 年以降に建設された個人所有のものである。個人のコーヒー水洗加工場が増加している背景には、協同組合のコーヒー買い付け・流通システムが、組合員たちにとってある種の重荷になっており、収入の増加に結びつかないことが挙げられる。

2025 年 1 月 6 日の聞き取りによると、協同組合がコーヒー買い付けを行う際の資金は、協同組合連合（Union）からの貸付である。Union からの貸付は、まず協同組合が必要な金額を Union に申請する。その後、エチオピア暦の 1（Meskaram）月 15 日[17]に申請額の 10 分の 1 が協同組合の口座に入金される。エチオピア暦 4（Tahsas）月[18]には、貸付金を使い切ることが通常であるという。一方、この Union は、オロミア協同組合銀行からの貸付で原資を賄っている。つまり、農民組合は Union への利子 16%と、Union がオロミア協同組合銀行から借りた金額に対する利子 13%の合計 29%を支払っているという。また、買い付けたコーヒーを輸出まで保管しておくためのアジスアベバに位置する倉庫[19]の使用料金として、1 クンタル（60kg）に対して 1 日あたり 60 ブルを支払う必要がある。つまり、このような原資融資のための利子や倉庫の使用料金などを計上すると、協同組合の加入者が手にする利益はほとんどない。また、協同組合は、あくまで Union の傘下にあるため、Union を通さずに直接銀行から融資を受けることは困難であるという。一方で、個人の場合、融資先となる銀行に制限はない。それゆえ、資金に余裕がある人のなかには、銀行から融資を受けて自らコーヒー水洗加工場を建設する者が出てきている。なお、個人でのコーヒー加工場の建設は、（１）コーヒー豆の加工場を建設する許可、（２）コーヒー豆の買い付け許可の 2 種類の許可を政府から得ることで可能となる。

現状、オッバトリ村では、村内のコーヒー収穫量の半数以上が、協同組合と、個人事業のコーヒー水洗加工場で、水洗方式のコーヒーに加工され、首都へと輸送されていく。JICA が設立した WaBuB を通した乾燥方式のコーヒーの買い付けもあるが、その取扱量はわずかであり、WaBuB を通さずに、商人に乾燥方式のコーヒー豆を販売する農民も少なくない。

６．考察

１）「コーヒー発祥の地」としての「カファ」

エチオピアのなかで「カファ」が「コーヒー発祥の地」であることについて疑問を呈する者はほとんどいない。だが、その「カファ」の中で「コーヒー発祥の地」が具体的にどこを指すのかについては熱い議論がなされており、「コーヒー発祥の地」を名乗ることの威信をめぐって論争が絶えなかった。それは、「カファ」が民族名であると同時に、旧王国名もしくは地域名であり、また帝政期での州の名前でもあったことに原因がある。帝政期、南西部一帯が「カファ州」に編成され、その州都はジンマ市とされた（地図１）。ところが、EPRDF 政権下で民族連邦制がとられると、「カファ」は南部諸民族州の、そして 2021 年に

は南西エチオピア諸民族州の「カファ県」（カファ民族が主として居住する県）のものとなり[53]、オロミア州に属するジンマ市は「カファ」と同定することができなくなった。

2007 年、エチオピア暦のミレニアム（2000 年）を記念していくつかのプロジェクトが立ち上がった時、「コーヒー発祥の地」であることを記念する博物館を建設するプロジェクトが提案された。その際、コーヒー発祥の地が「カファ」であるとして（当時の）南部諸民族州カファ県の県庁所在地ボンガにコーヒー博物館を開設することになった。だが、それに異を唱えたのがオロミア州ジンマ県である。ジンマ県の大半を占めるムスリム・オロモの人々は、コーヒー発祥の地はジンマ県ゴンマ郡かリンム・コサ郡にあるとして反論したのである。その後、ジンマ県の中で有識者たちによる話し合いの結果、ゴンマ郡のカッタ・ムドゥガと呼ばれる場所こそ、コーヒー発祥の地であるという主張が真正とみなされるようになり、そこにコーヒー博物館を設立することになった。筆者が 2010 年にカッタ・ムドゥガを訪れた際、その土地の所有主であった人物が、コーヒーの効用を発見した「カリド（Khalid）」とその葉もしくは実を食べて高揚したとされるヤギの「足跡」を見せてくれた[54]。コーヒー発祥に関わる「カルディ（Kaldi）の伝説」をうまく利用した演出である。ジンマ県の大半がムスリムであるため、「カルディ」ならぬ「カリド」というムスリム名が利用されたのである。

ジンマ県内でゴンマ郡のカッタ・ムドゥガ以外にも「コーヒー発祥の地」であると唱えた場所はリンム・コサ郡にもある。リンム・コサ郡のスントゥには、森林コーヒーが広範囲にみられる。そこには樹齢の高いコーヒーも数多く見られ、地元の人々はそこがコーヒーの発祥の地であると語っているという[55]。しかしながらジンマ県内で「コーヒー発祥の地」を決める選定のプロセスの中で、（その根拠はわからないが）リンム・コサ郡のスントゥよりもゴンマ郡のカッタ・ムドゥガが「真正性」を認められたのである。

一方、カファ県では、「コーヒーの母」と呼ばれる野生のコーヒーの大木がマンキラと呼ばれるカファの生物圏保護区にあることを、「コーヒー発祥の地」であることの根拠として掲げた[20]。ここでは「カルディの伝説」ではなく「野生のコーヒー」の大木がコーヒー発祥の地の根拠として利用されたのである。「野生のコーヒー」はジンマ県のゲラ郡の森林にもあるが、ジンマ県はそれを根拠として利用しなかった。

カファ県やジンマ県以外にも、「コーヒー発祥の地」を自認する地域がある。それは、現在の南西エチオピア諸民族州ベンチ・シェコ県のシェコ郡にあるゲシャ（Gesha）という土地である[56]。1950 年代に南米に伝えられて以来、世界的に有名になったゲシャと呼ばれる品種は、南西エチオピア諸民族州ベンチ・シェコ県シェコ郡のゲシャ森に由来するとされ、ベンチ・シェコ県の人びとは「コーヒー発祥の地」はここであると信じている。

以上のように、エチオピア南西部には、「コーヒー発祥の地」とされる地域が複数ある。それは、「カファ」が「コーヒー発祥の地」であるという「事実」を人々がそれぞれ地域独自の論理を用いて根拠づけようとする試みのなかで生まれた。それぞれの地域は、「コーヒ

ー発祥の地」であることを公認のもの、不動の事実とするための制度的取り組みが実践されている。

２）「コーヒー発祥の地」の確立に向けて

現在、それぞれの地域では「コーヒー発祥の地」を不動の事実に仕立て上げるための制度的取り組みがなされている。ひとつは記念碑の建立であり、もうひとつがコーヒー博物館の建設である。コーヒーを象徴する記念碑は様々である。写真１はカファ県のボンガ市に建てられたもので、コーヒーを沸かすための土器（ジャバナ）の模像である。類似の記念碑は、ジンマ市にも建てられていた[57]。2010 年に撮影されたジンマ市のこの記念碑はすでに取り壊されているが、2024 年にコーヒー茶碗（sini）を模した巨大なモニュメントが新たに町の中心部に建てられた（写真２）。

また「コーヒー発祥の地」とされる 2 か所に「コーヒー博物館」が建設されている。これらのうち、カファ県のボンガ市に建設された「コーヒー博物館」は、その運営をめぐっていまだに議論が続いており、まだ開館に至っていない。一方、それにあたかも対抗するかのように、同時期にジンマ県内で「コーヒー発祥の地」として住民の間で合意をみたゴンマ郡カッタ・ムドゥガにおいてもコーヒー博物館を建設しようと記念碑や看板まで建てられたが、現在にいたるまで完成にいたっていない。

そもそも「コーヒー発祥の地」を詳細に特定することは無意味なことであり、特定自体が不可能である。にもかかわらず、エチオピア南西部のなかで「コーヒー発祥の地」の特定に人々が議論を重ねるのは、そこに記念碑や博物館を建てることで、その「事実」を真正なものに仕立て上げ、それによって観光客の来訪を促すためである。観光客の来訪を期待できるのは、コーヒーが世界的な飲み物だからである。エチオピア南西部はカート（Catha edulis）の起源地であるとも言われるが、「カート発祥の地」について公の場で議論されることはなく、ましてや「カート博物館」を建てようという話が持ち上がったためしもない。

だが、2018 年以降、国内情勢は悪化し、期待されていた観光客の足は遠のき、そもそも「コーヒー博物館」は誰によって運営され、誰のために建て、その収益は誰のためのものなのか、という疑問が呈されるようになり、いまだに両博物館とも開館にいたっていない。

７．結論

「コーヒー博物館」の取り組みのように、一部では順調にいっていないものもあるが、エチオピア南西部では、行政当局、民間セクター（企業、商人）、生産者等複数のアクターが試行錯誤を繰り返しながら協働して「コーヒー発祥の地」としてのブランドの定着に取り組んでいる。世界的なコーヒーの供給過剰と価格の低下に対抗すべく、これらのアクターは外国の NGO の協力を得て「スペシャリティ・コーヒー」「有機栽培のコーヒー」などの付加価値をつけるための取り組みに従事している。外国に向けて独自の販路を個別に開拓することで、流通の多角化を実現した生産協同組合の取り組みは、今後一層広がっていくだろう。だが、すべての協同組合が Duromina のように成功しているわけではない。どの

ような差が成否を分けているのか、あるいは Duromina の例を見習って台頭してくる協同組合のなかでどのような競争が繰り広げられるようになるのか、今後も注視していきたい。

写真 1　カファ県ボンガ市内につくられたジャバナの記念碑（「コーヒー発祥の地、カファ」と書いてある）（2013 年 8 月 11 日石原撮影）

写真 2　ジンマ市の中心部に建てられたコーヒー・カップのモニュメント（2024 年 12 月 30 日石原撮影）

８．引用文献

１）小澤卓也、『コーヒーのグローバル・ヒストリー：赤いダイヤか、黒い悪魔か』ミネルヴァ書房、2010。

２）Davis, Aaron P., Tim Wilkinson, Zeleke Kebebew Challa, Jenny Williams, Susana Baena, Tadesse Woldemariam Gole, and Justin Moat, Coffee Atlas of Ethiopia, Kew: Royal Botanic Gardens, 2018.

３）福井勝義、「コーヒーの文化的特性――エチオピア西南部の事例から――」『茶の文化その総合的研究　第二部』、淡交社、1981。石原美奈子、「コーヒーの意味と価値の変容―エチオピア南西部の事例―」『人類学研究所 研究論集』、2013、第 1 号、150-180。

４）Merid Wolde Aregay, “The Early History of Ethiopia's Coffee Trade and the Rise of Shawa,” Journal of African History, 1988, 29, 19-25.

５）Pankhurst, Rita, 1997, “The Coffee Ceremony and the History of Coffee Consumption in

Ethiopia," in Katsuyoshi Fukui et al. (eds.), Ethiopia in Broader Perspective, Papers of the XIIIth International Conference of Ethiopian Studies, Vol. II, 516-539.
６）Van Arendonk, C., "Ḳahwa," in E. J. Brill's First Encyclopaedia of Islam, 1913-1936, Vol. IV, 1993, 630-635.
７）臼井隆一郎、『コーヒーが廻り　世界史が廻る』、中公新書、1992。
８）Bruce, James, Travels to Discover the Source of the Nile: In the Years 1768, 1769, 1770, 1771, 1772, & 1773, London: G.G.J. and J. Robinson, 1790.
９）Cecchi, Antonio, Da Zeila alle frontiere del Caffa.Vol.II, Rome: Loecscher, 1885, 507.
10）Van Arendonk, C., "Ḳahwa," in E. J. Brill's First Encyclopaedia of Islam, 1913-1936, Vol. IV, 1993, 630-635.
11）Von Strenge, H., "Wild Coffee in Kaffa Province of Ethiopia, Tropical Agriculture, 1955, 3(4), 297-301.
12）Salojärvi, Jarkko et al., "The genome and population genomics of allopolyploid Coffea arabica reveal the diversification history of modern coffee cultivars," Nature Genetics, 2024, 56, 721-731.
13）家田愛子、「女性たちの語る生殖に関する知識とその実践―エチオピア西部オロモ農村社会を事例に―」、南山大学大学院人間文化研究科人類学専攻修士論文、2007。
14）Abir, Mordechai, Ethiopia: The Era of the Princes, London: Longmans, 1968, 51, 53.
15）石原美奈子・眞城百華・宮脇幸生（編）、『変貌するエチオピアの光と影―民族連邦制・開発主義・革命的民主主義の時代』、春風社、2025。
16）石原美奈子、「コーヒーの意味と価値の変容―エチオピア南西部の事例―」『人類学研究所 研究論集』、2013、第１号、150-180。
17）Cecchi, Antonio, Da Zeila alle frontiere del Caffa.Vol.II, Rome: Loecscher, 1885, 508.
18）Abir, Mordechai, Ethiopia: The Era of the Princes, London: Longmans, 1968, 86.
19）Guluma Gemeda, Land, Agriculture and Society in the Gibe Region: Southwestern Ethiopia, c. 1850-1974, Ph. D. Dissertation, Michigan State University, 1996, 205-209.
20）Guluma Gemeda, "The Rise of Coffee and the Demise of Colonial Autonomy: The Oromo Kingdom of Jimma and Political Centralization in Ethiopia," Northeast African Studies, 2007, 9(3), 51-74.
21）Guluma Gemeda, Land, Agriculture and Society in the Gibe Region: Southwestern Ethiopia, c. 1850-1974, Ph. D. Dissertation, Michigan State University, 1996, 227-230.
22）Guluma Gemeda, Land, Agriculture and Society in the Gibe Region: Southwestern Ethiopia, c. 1850-1974, Ph. D. Dissertation, Michigan State University, 1996, 260.
23）Guluma Gemeda, Land, Agriculture and Society in the Gibe Region: Southwestern Ethiopia, c. 1850-1974, Ph. D. Dissertation, Michigan State University, 1996, 262-263。松村圭一郎、『所有と分配の人類学：エチオピア農村社会の土地と富をめぐる力学』、世界思想社、2008。

24）Yonas Seifu, A Historical Survey of Jimma Town (1936-1974), Master's Thesis, Addis Ababa University, 2002, 49.

25）FAO, FAO Coffee Mission to Ethiopia, 1964-65, Rome: FAO, 1968, 15.

26) Yonas Seifu, A Historical Survey of Jimma Town (1936-1974), Master's Thesis, Addis Ababa University, 2002, 49-50.

27) Guluma Gemeda, Land, Agriculture and Society in the Gibe Region: Southwestern Ethiopia, c. 1850-1974, Ph. D. Dissertation, Michigan State University, 1996, 262.

28）Yonas Seifu, A Historical Survey of Jimma Town (1936-1974), Master's Thesis, Addis Ababa University, 2002, 50-51.

29）Yonas Seifu, A Historical Survey of Jimma Town (1936-1974), Master's Thesis, Addis Ababa University, 2002, 51.

30）Guluma Gemeda, Land, Agriculture and Society in the Gibe Region: Southwestern Ethiopia, c. 1850-1974, Ph. D. Dissertation, Michigan State University, 1996, 287.

31）Gilkes, Patrick, The Dying Lion, Feudalism and Modernization in Ethiopia, London: Julian Friedmann Publishers, 1975, 51.

32）Guluma Gemeda, "Some Aspects of Agrarian Change in the Gibe Region: The Rise and Fall of Modern Coffee Farmers, 1948-1976," in Harold G. Marcus (ed), New Trends in Ethiopian Studies, Papers of the 12th International Conference of Ethiopian Studies, Vol.1, 1994, 730.

33）Yonas Seifu, A Historical Survey of Jimma Town (1936-1974), Master's Thesis, Addis Ababa University, 2002, 48.

34）Marcus, Harold G., The Politics of Empire: Ethiopia, Great Britain and the United States, 1941-1974, New Jersey: The Red Sea Press, 1995(1983), 118.

35）Yilma Yemanebrehan, "Institutional Analyses in Coffee Industry of Ethiopia," in Girma Adugna, Bayetta Bellachew, Tesfaye Shimber, Endale Taye, Taye Kufa (eds.), Coffee Diversity & Knowledge, Addis Ababa: Ethiopian Institute of Agricultural Research, 2008,12.

36）Bossolasco, Laurent, "A study case on Coffee (Coffea arabica L.), Limu Coffee," Istom, Ecole d'Ingenieur Agro-developpement International, 2009, 43. Dagm Alemayehu Tegegn, "Coffee production in Limmu Awraja, southwest Ethiopia: From the early twentieth century to the introduction of privatization policy," Cogent Arts & Humanities, 2022, 9, 1-23.

37）Yilma Yemanebrehan, "Institutional Analyses in Coffee Industry of Ethiopia," in Girma Adugna, Bayetta Bellachew, Tesfaye Shimber, Endale Taye, Taye Kufa (eds.), Coffee Diversity & Knowledge, Addis Ababa: Ethiopian Institute of Agricultural Research, 2008, 11.

38）Dessalegn Rahmato, Agrarian Reform in Ethiopia, Uppsala: Scandinavian Institute of African Studies, 1984, 37-38.

39）Seman Hussen Mohammed, The Oromo of Gomma, Southwestern Ethiopia, A History: 1880s

-1991, Master's Thesis, Jimma University, 2021, 103.

40）Kassahun Seyoum, Haile Tafesse and Steven Franzel, "Prospects for Improving Coffee-based Farming Systems," in Steven Franzel and Helen van Houten (eds.), Research with Farmers, Lessons from Ethiopia, Oxon: C.A.B. International, 1992, 177.

41）児玉由佳、「第 1 章　エチオピアのコーヒー生産者とフェアトレード―コーヒー協同組合の事例から―」『グローバル化と途上国の小農』、日本貿易振興機構アジア経済研究所、2007、27。

42）Kassahun Seyoum, Haile Tafesse and Steven Franzel, "Prospects for Improving Coffee-based Farming Systems," in Steven Franzel and Helen van Houten (eds.), Research with Farmers, Lessons from Ethiopia, Oxon: C.A.B. International, 1992, 176-178.

43）Yilma Yemanebrehan, "Institutional Analyses in Coffee Industry of Ethiopia," in Girma Adugna, Bayetta Bellachew, Tesfaye Shimber, Endale Taye, Taye Kufa (eds.), Coffee Diversity & Knowledge, Addis Ababa: Ethiopian Institute of Agricultural Research, 2008, 13.

44）Ishihara, Minako, "Coffee and Food Production in Qadamasa, Illubabor Region of Southwest Ethiopia: a Preliminary Research Report," Nilo-Ethiopian Studies Newsletter, 1993, 1, 14-18.

45）児玉由佳、「第 1 章　エチオピアのコーヒー生産者とフェアトレード―コーヒー協同組合の事例から―」『グローバル化と途上国の小農』、日本貿易振興機構アジア経済研究所、2007、27。

46）OXFAM, "Crisis in the Birthplace of Coffee," Oxfam International Research Paper, 2002.

47）Fetene Aragaw Temesgen, "The Role of Ethiopia Exchange (ECX) in Stimulating Agricultural Commodities Export: A Case Study of Export Coffee," Canadian Journal of Business and Information Studies, 2020, 2(3), 55.

48）Davis, Aaron P., Tim Wilkinson, Zeleke Kebebew Challa, Jenny Williams, Susana Baena, Tadesse Woldemariam Gole, and Justin Moat, Coffee Atlas of Ethiopia, Kew: Royal Botanic Gardens, 2018, 32-33.

49）Zakarias Shumeta & Marijke d'Haese, "Do coffee cooperatives benefit farmers? An exploration of heterogeneous impact of coffee cooperative membership in Southwest Ethiopia," International Food and Agribusiness Management Review, 2016, 19(4), 37-52.

50）Kodama, Yuka, "New Role of Cooperatives in Ethiopia: the Case of Ethiopian Coffee Farmers Cooperatives," African Study Monographs, Suppl.35, 2007, 87-108.

51）児玉由佳、「第 1 章　エチオピアのコーヒー生産者とフェアトレード―コーヒー協同組合の事例から―」『グローバル化と途上国の小農』、日本貿易振興機構アジア経済研究所、2007。

52）Zakarias Shumeta & Marijke d'Haese, "Do coffee cooperatives benefit farmers? An exploration of heterogeneous impact of coffee cooperative membership in Southwest Ethiopia," International

Food and Agribusiness Management Review, 2016, 19(4), 37-52.
53）吉田早悠里、「民族連邦制の功罪—南部諸民族州からの分離と新たな州の設立」石原美奈子・眞城百華・宮脇幸生共編『変貌するエチオピアの光と影—民族連邦制・開発主義・革命的民主主義の時代』春風社、2025、285-308.
54）石原美奈子、「コーヒーの意味と価値の変容—エチオピア南西部の事例—」『人類学研究所 研究論集』、2013、第 1 号、150-180。
55）Bossolasco, Laurent, “A study case on Coffee (Coffea arabica L.), Limu Coffee,” Istom, Ecole d’Ingenieur Agro-developpement International, 2009, 67.
56）Getahun Yosef, YäWängel Bərhanənna Yaskaffäläw waga bä Benchənna Maji akkababi, （福音の光とベンチ・マジ地方において払った犠牲について）自費出版 (in Amharic) 2018.
57）石原美奈子、「コーヒーの意味と価値の変容—エチオピア南西部の事例—」『人類学研究所 研究論集』、2013、第 1 号、150-180。

---

[1] エチオピア産コーヒーは店頭では「モカ」ブランドとして売られている。ただし、「モカ」という地名はエチオピアには存在せず、紅海をはさんだ対岸のイエメンにある港町の名である。日本で販売されている「モカ」には、イエメン産の「モカ・マタリ」とエチオピア東部産の「モカ・ハラリ」があり、「ハラリ」はエチオピア東部のイスラーム古都ハラルに由来している。

[2] コロナ禍以前までは、観光客を標的にした「コーヒー・セレモニー詐欺」も横行しており、大使館から注意喚起がなされていた（https://www.et.emb-japan.go.jp/Sec_notice_35.html、2025 年 3 月 14 日参照）。これは、観光客がエチオピアのコーヒー・セレモニーに対して抱くイメージを手玉にとって悪用したものとして興味深い。

[3] Guglielmo Massaia（1809－89）は、1850 年代にエチオピア南西部を訪れたイタリア人のカプチン修道士である。

[4] コーヒーの呼称は、エチオピアの民族ごとに異なる。たとえば、セム系のアムハラ、ティグライ、グラゲ、ハラリは「*buna*、*bunna*、*bun*」などが用いられる。クシ系のオロモは「*buna*」と呼ばれる。Leslau によれば、これら「*buna* 型」はアラビア語の *bunn* に由来する。一方、エチオピア南西部の諸民族では、オモ系のベンチではギャ（*gyav*）、マジャンギルでは「カリ（*kari*）」、ナイロ＝サハラ語族のボディは「ティカ（*tika*）」と呼ぶ（福井 1981: 184 参照）。

[5] コーヒーの精製方式は、ふたつある。ひとつが赤く熟したコーヒーチェリーを機械を通して水力を用いて外皮を取り除く方法で、一般的にはこちらの方が高値で取引される。もうひとつが天日干しにして黒く乾燥したコーヒーチェリーの堅果の殻を人力もしくは機械で除去する方式である。本論文では前者を水洗式、後者を乾燥式と呼ぶことにする。

[6] コーヒーベリー病(CBD)は、真菌病原体 *Colletotrichum kahawae* によって引き起こされるアラビカ種コーヒーのグリーンベリーの炭疽病である。筆者の聞き取りによると、ジンマに住むオロモの人びとは CBD を通称「コレラ」と呼んでおり、ケニアなど外国からもたらされたと述べている。

[7] 2024 年 8 月 21 日 Horizon 社ジンマ支部でインタビュー、Horizon 社のサイト（https://horizonplantationsplc.com/coffee/、2025 年 4 月 5 日閲覧）

[8] Teppi Green Forest Estate Share Company のサイト(https://teppicoffeeplantation.com/about-

us、2025 年 4 月 5 日閲覧)
[9] 2024 年 8 月 21 日 Horizon 社ジンマ支部でインタビュー
[10] 2024 年 8 月 26 日ジンマ県農業協同組合連合店舗管理責任者 FR 氏へのインタビューより。
[11] テクノサーブの目的や活動について、https://www.technoserve.org/参照。
[12] カッタ・ムドゥガは、ジンマ県のなかで「コーヒー発祥の地」とされる場所の名前である（石原 2013）。
[13] Kataa Mudugaa 農業協同組合連合の「コーヒー品質・認証専門家」の TH 氏のインタビューより。
[14] 2023 年 12 月時点での為替相場は、1 ドル＝約 56 ブルであったので、1000 万ブルは約 178,517 ドルに相当する。
[15] 作業員の日当は 160 ブル（1 ドル＝110 ブル）であり、6 日分の日当をまとめて受け取るという。
[16] Trabocca サイト（https://www.trabocca.com/our-coffees/ethiopia/limu/duromina-cooperative/2025 年 4 月 6 日閲覧）
[17] グレゴリア暦（西暦）では 9 月 25 日に相当。
[18] グレゴリオ暦（西暦）では 12 月 10 日から 1 月 8 日まで
[19] この倉庫は、ミッドロック社傘下の企業 Horizon 社が保有するものである。
[20] NABU（自然と生物多様性保護連合）サイト（https://en.nabu.de/news/2019/26312.html、2025 年 4 月 6 日閲覧）